企業人に映る学会

井　上　嘉　則

「分析化学」誌の編集委員・編集理事を仰せつかって丸四年が経過した。気楽にお受けしてしまったが，企業に籍を置く私にとっては毎回困惑の連続である。原因の多くは己の“薄学”にあるのだが，何処かにある種の“閾”を感じることがある。

企業人にとって学会との付き合い方は難しい。企業，特に経営者から見る「学会」は，「難しいこと」ばかりを議論している“閾”の高いところであり，凡人が立ち入る世界ではないと思っている人も多い。一時代昔の話のようだが，未だにこのような見方は存在している。一方で，学術研究は何も生み出さないと思い込んでいる人も多い。確かに，分析関連業種ではない限り，学会に参加しても製品に直結するような虫の良いネタは転がっていない。即物的な視点に立ち，即効性を良しとする企業にとって，学会の魅力は乏しくなりつつあるのかもしれない。

企業の学会に対する姿勢は景気や経営状態に大きく依存するため，昨今は学会等への参加は難しい環境にある。実際，年会・討論会で旧知の企業関係者と遭遇する機会がめっきり減っており，企業の「分析化学離れ」が顕然としてきたのかと若干不安になる。企業において分析化学及び分析化学的手法は必要不可欠であり，近年の規制強化や品質重視の傾向の中ではその重要性は一層高まってきている。にも拘らず，実学優先の企業では基礎学問である分析化学を学ぶ機会は皆無である。学会の利用も有効なのだが，そうは問屋が卸してはくれない。「石川や　浜の真砂は　尽くるとも　世に盗人の　種は尽きまじ」。石川五右衛門の歌ではないが，視点を変えさえすれば，仕事に役立つヒントは至る所に，そして学会にも転がっていると思うのだが，，，，

ところで，「分析化学」誌には毎年 120 報以上もの論文が掲載されている。2013 年は平年よりも若干少ない 118 報が掲載され，その内民間企業からの投稿論文は 16 % であった。この値の解釈は読者にお任せするが，企業内には分析に関わるノウハウが一杯蓄積されているはずである。分析化学の有用性を実証できるデータは企業内にこそ存在しているのである。それらすべてを開示するのが困難であることは重々承知しているが，それらの一部は公開特許の中には開示されている。民間企業にとって，論文投稿よりも特許出願が優先されるのは已むを得ないことではあるが，企業技術周知手段として積極的に論文投稿や学会を活用して欲しいと思う。一企業人の編集理事としては，民間企業からのなお一層の投稿を期待している。

分析化学は基礎・基本の学問ではあるが，問題解決に関わる知見や情報を得るための手法・技術として必要不可欠である。分析化学的手法が直面する問題の解析に利用され，解決策を見出すことができたとき，分析化学の意義や価値が評価され，そして華となる。分析化学の一層の発展には，多くの実証例を持つ企業側のさらなる理解・協力が必須である。企業と学会とのスタンスを見直す時期が来ているのかもしれない。

〔Yoshinori Inoue，日本フイルコン株式会社，「分析化学」編集理事〕